九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

キリシタンの史跡と遺物

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1515758

出版情報：史跡で読む日本の歴史 : アジアの中の日本. 8, pp.79-110, 2010-08-10. 吉川弘文館
バージョン：
権利関係：

三　キリシタンの史跡と遺物

服部英雄

一五三四年八月、イグナティウス・ロヨラ（一四九一―一五五六）を中心としてフランシスコ・ザビエル（一五〇六―五二）を含む七名によって、イエズス会が結成された。ローマ教（旧教）を批判するルターやカルバンに始まるプロテスタント教会（新教）が普及していたが、新たに結成されたイエズス会は、旧教カトリック側の体制内改革運動であった。一五七一年九月二十二日カブラル書簡に、「一向宗はルーテルの宗派に似る」とある（『イエズス会士日本通信』）。仏教の根幹であった自力救済（修行）や呪文・梵字、般若心経・舎利礼文などの経典を悉く否定して、ラディカルに飛び出していった鎌倉新仏教（とくに一向宗）は、ルター派・プロテスタントに似ている。これに対し、イエズス会は、たとえるならば旧仏教側の枠組みを維持したうえでの改革を志向した叡尊、忍性、明恵のようなイメージに近いのではないか。十六世紀の日本に影響を与えたのは彼らイエズス会である。戒律を重視し、清貧・貞潔であり、また戦闘的でもあって、世界布教を目指していた。

ザビエルは、ポルトガル西インド植民地の拠点ゴアを経て、鹿児島に上陸した。それは一五四九年のことで、イエズス会結成後、わずかに一五年で日本にまで到達した。以後五〇年足らずで、キリス

ト教は日本各地に広まった。

フランシスコ会やドミニコ会の起源は旧教・新教分裂よりも前、十三世紀にさかのぼるが、日本へ来たのはイエズス会よりも遅かった。ドミニコ会は九州から、フランシスコ会は東北から布教を広げた。

二〇〇八年に、ローマ法王庁は長崎において列福式をおこなって、江戸時代初期に殉教した一八八名を福者に追加した。聖人に次ぐ栄誉である。その殉教地は

八代（一一名）、萩・山口（二名）、薩摩（一名）、生月（三名）、有馬（八名）、天草（一名）、京都（五二名）、小倉・大分・熊本（加賀山一族一八名）、江戸（二名）、広島（三名）、雲仙（二九名）、米沢（五三名）、長崎西坂（四名）、大坂（一名）

とされていて、全国にまたがっている。

殉教地は文献と照合しての伝承地であろう。狭義の史跡ではないが広義の史跡にあたる。今回顕彰された殉教者は天正遣欧少年使節の一人だった中浦ジュリアン（長崎出身）や、日本人として初めてエルサレムを訪問し江戸で殉教したペトロ岐部（大分出身）ら司祭四人と、信徒一八四人である。もっとも数が多いのは米沢北山原での処刑者五三名である（上杉景勝臣甘糟右衛門ほか）。かれらは奥羽の各地で拘束され、この刑場にて処刑されたのである。かつて奥州には天正遣欧使節と並ぶ慶長遣欧使節（支倉常長ら）をローマ法王のもとに派遣した大名伊達政宗もいた。

このように、九州から始まって都に至ったキリシタンは、またたくうちに日本列島にくまなく広が

った。現代の日本人のキリスト教信者は全人口の一―二％とされているが、この時代にはいかほどの布教をみたのであろうか。イエズス会巡察師ヴァリニャーノの「日本巡察記」には天草諸島の信徒三万人とある。キリシタン大名毛利秀包の城下久留米では七〇〇〇人の信者がいたという。一五八一年下（九州）では一一万五〇〇〇、都では二万五〇〇〇人であった。一五八六年豊後では三万人を超えた（各年日本年報）。一六二六年二月二十六日コウロス神父は深江二〇〇〇人、口之津二〇〇〇人、島原六〇〇〇人が管区内の信者だと報告している。天草島原の乱で原城に籠城した人々は徳川幕府の認定した数字で四万人以上であった。原城籠城者は鉛製のクルス（十字架）を持っており、「立ちかえりキリシタン」（いったん棄教したがふたたびキリシタンになった信者）であった。この数は、合併した現在の島原市の全人口四万九〇〇〇人にも匹敵する。おそらく信者の割合は九州では今よりも多く、教会（南蛮寺）は城下や村の各地に建てられていった。しかし長い弾圧の時代があって、痕跡は消された。

文献史料が語る信者の数については誇張もあろうから、史料批判が必要だという意見が多いだろう。しかし思いもかけぬ場所から出土する遺物は、歴史学者の予断を否定する。まさしく史跡の歴史学である。以下管見に入った遺跡遺物を簡単に紹介したいが、この数年素材は著しく増加している。出土時にはキリシタン遺物として認識されなかったけれど、研究の進展によりキリシタン遺物として再確認されたものもある（後述の鹿児島城花十字紋瓦）。事例はアップデートで増加する。以下は現時点での中間報告となる。

1　教会・伝道所

長崎サント・ドミンゴ教会跡

長崎代官村山等安が一六〇九年（慶長十四）に敷地を寄進して、薩摩京泊のサント・ドミンゴ教会を移設した。五年後の一六一四年（慶長十九）、禁教令により破壊され、その地は元和五年以降末次平蔵の屋敷地となり長崎代官所が設置された。

教会の遺構は敷き詰められた石畳と石垣を持つ地下室、井戸である。ここからは花十字架紋瓦（軒丸瓦）が八五点出土した。遺跡は学校校舎の階下に保存公開されているが、付設の遺物展示室があり、壁一面に出土した花十字紋瓦が七六点、市内の他所からの同瓦が一五点飾られていて、見るものを圧倒する。同じ敷地に建った教会建物の瓦でありながら、一点一点の花十字紋が異なっている。十字の先の花模様は微妙に長さ、細さが異なる。十字を囲む宝珠（連珠）の数にも一二、一六、二〇のものがあり、宝珠だけで三タイプに分類される。注文で一度に焼いたわけではないらしい。三巴紋瓦とも共伴していて、建物の軒先がすべて花十字紋瓦で葺かれていたわけではなさそうだ。なぜか発掘報告書では瓦実測図はわずか三点分しか掲載されていないので、この展示室に立つと新鮮な印象を受ける。壁の下に十字紋の鬼瓦（長崎市内の深堀遺跡より出土）も展示されている。

鬼瓦にも十字を誇示し、軒先には点々と花十字が並ぶ教会。いま展示室壁の前に立って得られる感

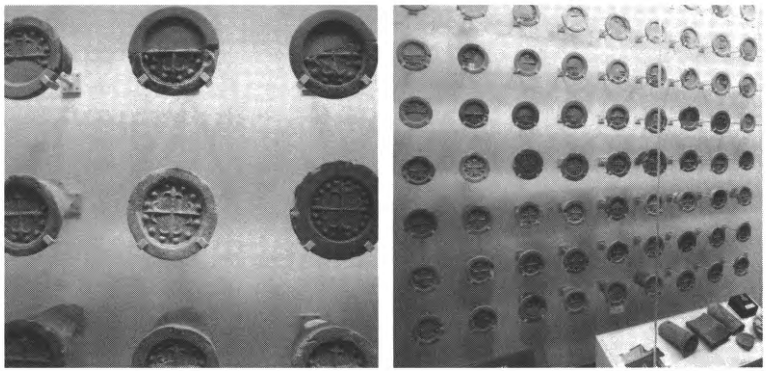

図1　長崎サント・ドミンゴ教会跡出土の花十字架紋瓦

動の、何十倍もの感動を信者は得ることができた。マリアとイエスをモチーフにした鉛製メダイ、クルスも出土している。長崎市内にはミゼリコルディア本部教会のような病院を伴う慈善施設がある。サンラザロ病院はラザロの名を冠するから、「ライ」（ハンセン氏病、レプラ）患者の収容施設であろう（ライ患者収容施設レプロサリウムはラザレットとも呼ばれ、乞食の患者ラザロに由来する）。

市内からもメダイや聖遺物容器が出土していて、年々キリシタン遺物の数は増加している。

久留米両替町教会

久留米城主は毛利秀包、田中吉政、有馬豊氏と替わる。毛利秀包（毛利元就九子）の夫人は、大友宗鱗女子マセンシアであった（「一五八七年日本年報」『久留米市史』七）。秀包もクリスチャンとなり、洗礼名をSimao（シマオ、ないしシマン・フィンダナオ）という。「一六〇〇年年報」によれば、（既設の）レジデンシア（伝道所）に神父が派遣された。つづいて神父のための住院と聖堂を新しく建設した。フィンダナオ（秀包）が城の近くに建設した教会堂のほかに、町のキリシタンたちが、もう一つ教会を建てた。

両替町は久留米城外堀の外側になり、町屋である。両替町一帯はのちの有馬時代に南北の短冊形地割りに変更されるが、その下層で、南北地割りではなく東西方向の細長い大型建物が検出された。有馬氏入城以前の建物である。短冊形ではない先行地割りの中に中央に七本、その両側に規格的にならぶ各一四本（計二八本）の柱穴列が検出された。柱穴には複数の柱痕跡がある。同じ位置に二回柱が立った。つまり建物は再建されている。規模は幅五㍍、長さ一五㍍ほどである。

この南の池状遺構から正面に十字架紋を浮き彫りにした軒平瓦が二点出土した。キリシタン瓦である。毛利家家紋沢瀉紋瓦も出土した。フィンダナオの城の近くにあった教会か、町のキリシタンが建てた教会か。毛利家家紋瓦からすれば前者だろうか。報告書にはその復原建物の写真がある。ヴァリニャーノ指示の建築規則によって機能を重視した復原で、柱数・建物の規模は遺構に忠実ではない。

肥前天草郡上津浦南蛮寺

天草衆であった上津浦領主種直は一五九〇年（天正十八）に入信し、洗礼名ドン・ホクロンを名のっていた（フロイス『日本史』）。一六一一年（慶長十六）、天草には四つの小さな天主堂があった。一六一七年（元和三）上津浦庄屋ら信徒はイエズス会の救済を証す証言文書（コーロス証言文書）をローマに送った（松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』、『有明町史』にも写真がある）。八代の近く、神津浦（上津浦）の敬虔なキリシタンの存在は『日本切支丹宗門史』にもふれられている。

この地の正覚寺は一六三七年（寛永十四）におきた天草島原の乱の後、この地を統治した天領代官鈴木重成が、南蛮寺の建っていた場所に建立したものである。一九八五年（昭和六十）本堂解体の際

にその床下から扁平型、自然石型、かまぼこ型（二基）の三様式のキリシタン墓碑、数基が発見された。かまぼこ型二基の正面に、ＩＨＳの文字と十字架紋（いわゆる干十字で左上に加線がある）が刻まれていた。ＩＨＳはIesus Hominum Salvator（イエスは人類救済者）の頭文字で、イエズス会章である。その左右には人名と没年月があったが、削り取られて判読困難とされる。『有明町史』は「大つ□きんた」「慶長□□年」と読みうる可能性を示唆し、キンタは女性の霊名であり、大津留キンタではないかとする。

佐賀城下南蛮寺

佐賀城下町図・慶長御積絵図（佐賀県立図書館）には城下の東北・柳町に南蛮寺が画かれている。早く三好不二雄によって『佐賀県史』に紹介された。肥前龍造寺領、およびそれを継承した鍋島領には、初期にはイエズス会が、後にはドミニコ会が影響を及ぼした。龍造寺隆信はキリシタン大名有馬晴信と敵対したから、「デウスの敵」、「異教徒の暴君」とされることが多い。しかしヴァリニャーノは隆信への接近を試みているし、佐賀で歓待も受けている。フロイスがシーザー（ジュリオ・セザル）以上だと評したのはほめ言葉であろう。「佐賀侯」とよばれた人物は受洗した。実現はしなかったが隆信の子家信は洗礼を希望していた。イエズス会の教会は須古（鹿島市肥前浜）、レジデンシア（伝道所）は不動山（嬉野市）にあった（一五八一、八三、八四、一六〇七、〇九、一〇、一二、日本年報『新異国叢書』ほか）。ドミニコ会の教会は浜（鹿島市肥前浜）に「ロザリオの聖母教会および修道院」、鹿島に「聖ビセンテ教会」、佐賀に「聖パブロ教会」があった。よって南蛮寺はドミニコ会教会と考えられる

（『オルファーネル　日本キリシタン教会史』）。ドミニコ会と鍋島勝茂の交流は『異国日記抄』付録や鍋島文書に残されたルソン大司教、フィリッピン諸島長官、イスパニア国王との外交文書により明確である。関係史料が多く、研究も多い。

豊後府内のダイウス堂と教会墓地

一五五三年に教会が建設され、教会墓地も設けられた（フロイス『日本史』）。教会の位置は「府内古図」に画かれた大友館背後西方の「ダイウス堂」の位置とされてきた。このダイウス堂近接地で教会付属墓地とされる墓地が検出された。小児のみの墓域があり、育児院での病死者とされる。ただし成人墓では、伸展葬と屈葬が混在していた。伸展葬はキリスト教徒、屈葬は仏教徒と考えるほかはない。

府内（大友）遺跡については大部の報告書が続々と刊行されているが、『キリシタン大名の考古学』にも坂本嘉弘・田中裕介・上野淳也・後藤晃一らによる詳しい考察がある。府内ではナスビ型とか大友型とかいわれる、特殊なメダイが多数検出されている。ナスビ型メダイは大友氏の勢力下の博多や、黒崎にも若干が出土する。伝世品でも平戸個人蔵のものがある。

京都下京教会・南蛮寺跡

一五六〇年ビレラが設け、一五七八年オルガンチーノらが完成。建築には有力信徒のほか、織田信長の支援も受けた。「サンタマリア御昇天寺」である。

発掘調査によって、裏面に線刻画のある石硯が発見された。司教帽ミトラと牧杖を持つ司教と、ろうそく消しを持つ信者が画かれる。五野井隆史によれば、上京した司教で名前のわかる二人のうち、

一六〇五年に再建された下京教会（姥柳町）にてセルケイラがミサを執りおこなった光景だという（同志社大学田辺キャンパス歴史資料館蔵、同ホームページに写真）。

北海道・大千軒金山布教所（松前町）

ここは遺跡というよりは伝承地かもしれないが、日本最北端の近世初期キリシタン遺跡である。北海道におけるキリシタンの活動はH・チースリク『北方探検記』（聖心女子大学カトリック文化研究所、一九六二）に記されたアンジェリスやカルワーリュ（カルバリヨ）の活動が知られている。アンジェリスの蝦夷地渡航は一六一八年で、日本国内での布教は困難になっていたが、津軽から蝦夷地ではまだ布教の可能性があった。

一六二〇年に旅行記を残したカルワーリュ（ポルトガル生まれ）は松前から津軽への渡航に際し、金掘りとしての手判（渡航手形）を受けている。四年ほど前に蝦夷地で金山が発見され、従事のため渡海する人が昨年は五万人、今年は三万人以上であること、そのなかに多数のキリスト教信者がいたことが述べられる。蝦夷地に渡るものは商人か金掘りであるが、カルワーリュは商人らしい商品を持たなかったので、金掘りとして申告し渡海したとある。松前の殿は禁教の法度を出してはいるが、ここは日本ではないから、として彼らの往復を大して気にしていない。カルワーリュは松前で信者たちの告解を聞いたのち、内陸に一日路程の距離にある金山（大千軒金山）に赴いて告解を聞き、聖母被昇天祭をおこなった。金山にはイエズス会の同宿（伝道師）であったベ・ドウキュウ・ドミンゴスとガイファン・ディオゴがいた。

かれが記したように大千軒金山のような鉱山では労働力を必要としたし、他の労働よりも高額な日当が得られたから、各地から人が集まってきた。都市のように人口が多く、キリシタンが布教を目指した。弾圧を恐れたキリシタン信者が隠れ住むことも多かった。いま大千軒岳の登山口、知内川に沿った金山番所跡近くに十字架が立てられているのは、後にここで殉教があったからである。金山はもっと頂上の近くであった。のちにアンジェリスは江戸で、カルワーリュは仙台で殉教した。

2 教会遺物

花十字架紋瓦

つぎに本来は教会に付属していた可能性の高い遺物を紹介する。すでにみたように長崎教会では花十字架紋瓦（軒丸瓦）が出土していた。宮下雅史「花十字紋瓦考」（『西海考古』五）によって長崎の事例をみると、さきに紹介したサント・ドミンゴ教会遺構のほかに、万才町の数地点（①県庁新別館地点より一点、ほかにメダイ二点、②町年寄高島家跡から二点、ほかメダイ・十字架、③ミゼリコルディア跡より二点ほか聖ペドロのメダイ一点）、興善町では新町乙名八尾家跡より二点、ほか錫製十字架、ガラス製ロザリオ玉、宿老徳見家跡から四点、ほかにも栄町・桜町・金屋町の三地点から四点の花十字紋瓦が出土した。この報告のあと現在までにさらに築町・磨屋町（聖遺骨箱も出土）、立山奉行所（七点）、炉粕町（町名はセントルカスに由来）、そして出島から、花十字紋瓦が出土した。軒丸の花十字紋瓦と組み合わ

される軒平瓦は上向き三つ葉唐草紋とされている。

出島（国指定史跡出島和蘭商館跡）ではオランダ・カピタン屋敷跡の二地点から花十字紋瓦三点、乙名部屋跡から花十字紋瓦三点が出土した。前者は建て替え時の廃棄物という。後者は土坑からまとまって見つかった。紋様は長崎市中のサント・ドミンゴ教会や興善町宿老徳見家跡出土瓦に酷似する。出島はオランダ（プロテスタント国）の商館になる前は、ポルトガル（カソリック国）の商館であった。市中と同じものであれば、ポルトガル時代の遺物であろう（『国指定史跡出島和蘭商館跡　カピタン屋敷他建造物群発掘調査報告書』長崎市教育委員会、二〇〇八）。

花十字紋瓦は教会遺物の代表的存在といえる。しかしすべてが教会跡から出土するわけでもなく、上記のように町乙名のような世話役の家からも検出される。万才町（長崎県庁新別館の位置）からでた花十字紋瓦は、目と鼻の先にあった岬の教会（被昇天の聖母教会・サンパウロ教会）にあったものではないか。信者は教会の建築素材を神聖視し、信仰の対象として、破壊された教会から運び出すこともあった。手元に置かれて信仰の対象になったものは、摩耗する。原城出土の花十字紋瓦は摩耗が顕著であった。

同笵、つまり同じ瓦笵（制作時の型）から作られたと指摘されているものに、栄町ミゼリコルディアと立山の両者、あるいは万才町と後述する大村城下の両者がある。

大村市乾馬場遺跡の花十字紋瓦

大村純忠（洗礼名ドン・バルトロメウ）の居城大村三城城下には「御やどりの教会」があったが、松

浦・後藤・西郷連合軍によって、一五七二年に焼かれ、その後宝生寺を宣教師の住院と日本語を学ぶ語学校に作り替え、大村でもっとも大きな教会が同じ敷地に建てられた。花十字紋瓦は城下乾馬場（いんのばば）から出土した。圏文部分が削られて花十字の部分のみが残されていた。信仰対象として、どこかの破壊された教会から運び出された。述べたように、大村瓦は長崎万才町からの花十字紋瓦に同じ笵であると確認されている。

大村藩家老宇多家跡の寛永十六年銘のある墓石下から、青銅製メダリオン（大型メダイ、無原罪（むげんざい）の聖母）も検出された。スペイン王カルロス一世代（一五一六―五六）に、マドリッドの王立造幣局で製造されたものという（大村市立史料館蔵）。のち同型のものが踏み絵に使われた（旧長崎奉行所引継資料、東京国立博物館蔵）。

鹿児島城二の丸出土の花十字架紋瓦

鹿児島城（鶴丸城）二の丸からは花十字架紋瓦が出土しているが、点数はわずか四点である。量から判断すれば、軒先に花十字紋瓦が連続する（教会）建物があったとはいえない。長崎出土瓦に似る形状のものがあるが、細部が異なるようだ。

鹿児島では十字といえば島津氏の「丸に十字」の家紋の印象が強く、ほとんど先入観になっていた。発掘担当者も、島津家紋の変形と考えて、キリシタン瓦とは連想できなかったようである。これがキリシタン瓦であることを指摘したのは山崎信二である（『近世瓦の研究』）。

薩摩藩主家久（いえひさ）の義母がキリシタンであった。カタリナ（永俊尼（えいしゅんに））は肥後宇土（うと）（小西行長領（こにしゆきながりょう））にいた薩

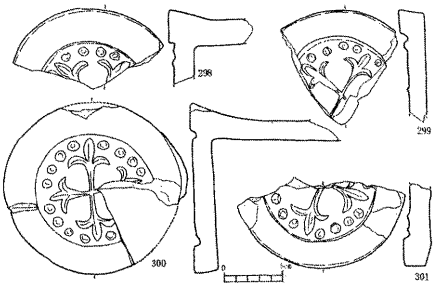

図2　鹿児島城（鶴丸城）二の丸出土の花十字架紋瓦

州家島津忠清の妻となり、その女子が家久の妻となって光久を生んだ。家久は鹿児島城（鶴丸城）を築いた人物である。家久の義母で、光久（藩主）の祖母となる女性が、キリシタン信仰を維持し続けた。一六一二年のコロウス神父書簡によれば、神父を迎えたカタリナのところに娘（家久夫人）がやってくる。城内にいた夫人とカタリナは同居はしていない。しかし城内に信者がいた。鹿児島城下で、大坂城豊臣方だったキリシタン明石掃部の子小三郎と、彼をかくまっていたキリシタン藩士が摘発される事件が起きる。とうとうカタリナも種子島に流された。彼女こそキリシタン組織の中心人物だったのだろう。カタリナの前夫との子（喜入忠政の妻）とその女子（於婦理）、つまり女性三代がキリシタンで、ともに流された（パチェコ・ディエゴ『鹿児島のキリシタン』一九七五）。

なお山崎信二は鶴丸城出土の軒平瓦に「大」の字を刻したものがあり、有馬・原城からもそれが出土するとして、キリシタンに関連する可能性を指摘している。長崎市金屋町ではこの「大」字瓦が大村家の家紋・瓜もっこ入りの瓦とともに出ているので、大村家の「大」と考える人もいる。しかし鶴丸城や原城は大村氏とは関連がない。デウスは大臼と表記され、大日ともされた。安土や京都、豊後府内にはダイウス（大臼、大宇須）という地名が残った。大臼に由来する「大」の可能性も考えられる。

図3　秋月城出土の花十字紋瓦

その他の遺跡から出土した十字紋瓦

宇土城と呼ばれる城跡は二つある（小西城および西岡台）。宇土高校社会科クラブによる発掘で、ドン・アウグスチノ（小西行長）の城跡からキリシタン瓦が見つけられた。愛藤寺城のものと同じく光芒があるが、十字はない。光芒のみのキリシタン瓦として紹介する。『宇土城（西岡台）』Ⅰに実測図と写真がある。宇土市教育委員会蔵。

一九七一年（昭和四十六）、愛藤寺城跡（熊本県山都町、旧上益城郡矢部町犬飼村）の畑地から、十字紋瓦（周辺を光芒と火炎）が発見された。キリスト教の聖旗をかたどっており、キリシタン大名であった小西行長時代の城代ジョルジュ・結城弥平次によって建てられた伝道所に由来するとされる。十字紋瓦は一部が個人蔵、一部が山都町教育委員会蔵。

筑前秋月城（福岡県朝倉市、福岡県立甘木歴史資料館所蔵）の十字は太く短くて、他の地域の花十字紋とは異なっている。ゴルゴダの丘の表現やイエス磔の十字の形など、大分県豊後大野市の「市万田クルス碑」に意匠が似るとされる（大石一久氏、および朝倉市教育委員会による）。

このように現段階の九州では、長崎と久留米をのぞけばすべて城跡からの出土である。為政者への信仰浸透を示すものである。

南蛮鐘（キリシタンベル）

つぎに教会遺物として南蛮鐘が考えられる。当時の南蛮鐘は日本で四点が残されている。南蛮鐘（キリシタンベル）は教会か付属施設にあったのであろう。史跡からの歴史を考える視点からもこの遺物は重要である。

京都妙心寺春光院の銅鐘

妙心寺塔頭春光院に伝わる銅鐘（国重要文化財）には十字架とＩＨＳ、1577と刻まれている。一五七七年すなわち天正五年、京都の南蛮寺はあらかた完成に近かったであろう。この鐘も京都・南蛮寺にかけられていたといわれる。嘉永七年（一八五四）ころ仁和寺から金子の抵当として譲渡されたもので、その折、仁和寺が与えた旧記の概要が、西村貞『南蛮美術』に紹介されている。ただし西村氏も「わけのわからないことばかり」として、書かれた朝鮮由来に始まる経緯を否定し、京都天主堂の遺鐘とみている。

大分県竹田市中川神社蔵の鐘

表面に十字章と「HOSPITAL SANTIAGO（下段に）1612」という銘が鋳出されている。一六一二年は初代岡藩主中川秀成（なかがわひでしげ）が逝去した年である。秀成の父であり、賤ヶ岳（しずがたけ）合戦にて戦死した中川清秀は、摂津の出自で、高山右近（たかやまうこん）と行動をともにすることが多く、近しい関係にあった。

鐘は中川神社に伝来した。中川神社は一八七二年（明治五）四月、旧岡城内の藩祖廟所・荘厳社、心嶽社、宗鑑社を移築し建立された。すなわちこの鐘は一六一二年にはHOSPITAL SANTIAGO（サンチャゴ病院）にあって、禁教令以後に岡城内に移動されたものである。

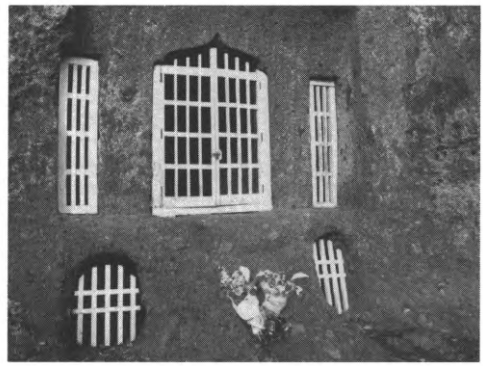

図4　大分県竹田市　キリシタン洞窟とサンチャゴの鐘

レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』一六一四年（慶長十九）の条にはサンチャゴ病院が「聖ヤコボの病院」の名で出ている（聖ヤコボはサンチャゴのラテン語読み）。サンチャゴ病院（ミゼリコルディア〔慈善院〕付属病院）という名前の病院は前掲のごとく長崎・酒屋町にあった。よってこの鐘はそのサンチャゴ病院にあったものとされる（長崎市にはミゼリコルディア〔慈善院〕旧地に石碑がある）。同書一六一一年に病院の詳しい活動が記される。ハンセン氏病患者の収容施設であった。ただしサンチャゴという名前は一般的なもので多くあったし、病院も各地にあっただろうから、断定はできない。

北村清士『大分県のキリシタン史料』（一九六〇）はジョアン・バプチスタ・ボネリの一六二〇年度「日本年報」（一六一七年パジェスの記録）に「豊後でペトロ・ナバロ・パウロとフランシスコ・ボルド

リノの二人のゼスス会神父が難儀しながらも久しく洞窟に隠れていたが、ここを出て再び熱心な布教に従った」という記事を紹介する。この洞窟がどこにあったのかについては志賀氏の支配下とあるだけで、もちろんわからない。竹田・岡城下に西村貞『南蛮美術』にも紹介されたキリシタン礼拝堂とよばれる洞窟があり、大分県指定史跡となっている。ここと年報の洞窟を同じと考える人も多いが、この地方に洞窟は多いし、城下の中心なので、断定はできない。

中川秀政がキリシタンであったとする西村説には松田毅一が批判を加えているが、中川一族周辺にキリシタンが多かったとはいえる。北村清士は「古田織部は中川清秀妹を妻とし、古田妹は高山右近に嫁した。茶人土屋宗俊の妻は高山右近の娘である。その宗俊は古田織部の家に寄食していた」として古田織部がキリシタン信仰者の周辺にいたことを指摘する。中川家家老に織部の本家筋にあたる古田一族がいた（岡藩ほか豊後に信者が多かったことはマリオ・マレガ『豊後切支丹史料』サレジオ会、一九四二）。

中川の紋所は中川車とも、中川轡ともいわれるが、見ようによってはＩＨＳの紋章かと見まごうもので、中川クルスともいわれる（沼田頼輔『日本紋章学』一九二五）。中川クルスが十字を示すものであるのかについては、否定する見解もある（松田毅一『キリシタン・史実と美術』）。だが城内廟所にキリシタンベルを置いても、それほど不自然に思われなかったとはいえる。竹田市立歴史資料館寄託。

細川家の家紋である九曜紋鐘

細川家・永青文庫所蔵の細川家家紋・九曜紋を浮き彫りにした銅鐘（キリシタンベル）がある。細川

家では毎年七月十七日にガラシア夫人（明智たま）の御弔い（年忌祭）を中津教会でおこなっていた（『日本切支丹宗門史』）。拘束されていた信者の恩赦もおこなわれた。年欠七月七日忠利書状（松井文庫・松井文書八四―三三）では、夫細川忠興がガラシア年忌祭は法要として禅寺にておこなうように指令している。これに対し子の忠利は「心さし申度候」「半天連（バテレン）にて御とむらい候へハ、不及申候」としている。やはり子だから、母の心を思って、教会での年忌祭を望んだ。忠興も忠利もローマ字印章を使った時期があった。禁教令の強化（一六一三年、慶長十八）までは細川家中にはキリスト教を支持する空気があった。

ベル（鐘）は細川一家がキリシタンであった時代に家紋の九曜紋を入れて鋳造された。『天草・島原の乱』（八代市立博物館）の解説によれば、慶長九年（一六〇四）頃小倉で三口の大鐘が作られており、一つが細川家に、一つが下記の森家に伝わったものに該当する、とある（出典未詳）。

旧津山城九曜紋南蛮鐘

現在南蛮文化館にある南蛮鐘は津山城天守閣にあったものである。津山城落成時に森忠政が細川忠興から寄贈されたものといい（『森家先代実録』）、九曜の紋が浮き彫りにされる。意匠は共通だが、永青文庫のものは九曜の上の池の間が小曜一つ半ほどのスペースしかないが、南蛮文化館のものは二つと半分ぐらいのスペースがあるから、細長く見える。同笵ではないが、同じ意匠の鐘を全く別個に鋳ることはむずかしいだろうから、同一工房、おそらくは上記小倉での制作と考えられる。

伏見には、いまも長岡越中町がある（長岡は細川氏の旧姓）。かつて細川忠興屋敷と森忠政屋敷は向

かい合っていた。ともに徳川家康の向島屋敷に入り警備にあたる、など同一歩調をとり、親交があった。津山城天守最上層の天井にかけられていたという。

そのほか飛見丈繁『越中のキリシタン』（一九六三、二〇〇二復刊、自家版）には「SCTS PATR」と陽刻された鐘の写真が掲載されていて、西村貞『南蛮美術』も紹介している。バチカン図書館がパトリチウス教会の鐘で十六世紀頃のものと鑑定したとあるが、パトリチウス教会（PATR）が当時の日本で布教したとは聞かない。飛見が所持していた現物も現在は所在不明。

3 キリシタン墓地・木棺とキリシタン墓碑

キリシタンの遺体は伸展葬で埋葬された。日本固有の埋葬は掘削土量が少なくてすむ屈曲位（座棺）とされている。フロイスも「われわれの棺は細長い。彼らのは円く樽半分ほどである」「われわれの死者は顔を上向きにする。彼らの死者は座り、顔を膝の間にはさむ」と記述する（『ヨーロッパ文化と日本文化』）。キリシタン墓であるのか否かは、伸展葬であるのか否かが、目安・指標となる。

墓の上に置かれるキリシタン墓碑は、古くから多くの数が知られている。基本的な形態は欧風のかまぼこ型（樽型、台型）で、伸展葬に対応する。九州はほとんどこのタイプであるが、長短がある。立石を用いた日本式もあって、畿内に多い。十字（クルス）ないしイエズス会であればIHSを刻むか墨書する。INRIすなわちIESVS NAZARENVS REX IVDAEORVM（ユダヤの王、ナザレのイエ

ス、VはU）の頭文字を刻したものもある。日本年号が書かれることがふつうだが、本来ならばキリスト暦（西暦）が刻まれて、人名も洗礼名が書かれる。ローマ字やアラビア（算用）数字が記されることもある。ローマ字もアラビア数字も当時の日本で日常みることはなかった。仏教でいえば梵字（サンスクリット語）が果たしたような宗教的な効果をローマ字の神秘性が担った。キリシタン墓碑には無銘のものも多い。墨書が風化し消えたのだろうか。

上記の条件のうちいくつかを備えていればキリシタン墓とみることができる。片岡弥吉「キリシタン墓碑の源流と墓碑形式」（『キリシタン研究』一六）がヨーロッパ（ローマ周辺）のキリシタン墓碑と比較して指標を的確に示しているので参照されたい。宣教師の墓と一般信徒の墓では差があったのではないかと推測されるけれど、指標がどこにあるのかは不明である。

キリシタン墓碑には古くから県や市町村指定の史跡になっているものもある（国指定は下記西有家の一点のみ）。それらを含め、多くは出土した原位置（地下）にそのまま置かれているとはいえない。出土後何らかの事情で移動し集められた。

全体の概要を知りうる著書に『九州のキリシタン墓碑』があるが、書名のように全国の事例には及んでいない。数の多い長崎には『長崎県の文化財』、大分には『大分県の文化財』、半田康夫『豊後キリシタン遺跡』（いずみ書房、一九六一）などがある。『復活の島』五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書は、近現代までを調査対象とした全島調査である。

以下では代表的な墓地とキリシタン墓碑および注目すべき特徴を持つ遺品を紹介したい。

江戸・八重洲北口遺跡

江戸城外堀の内側で、常盤橋御門の近くに当たる。土坑墓六基、木棺墓四基。木棺の一つに十字架の墨書。聖母鋳出メダイ、ガラス製ロザリオ、木製ロザリオを出土。常盤橋御門は東海道や中山道の起点である日本橋に近接しており、ふつうは江戸城の正門として扱われる。その脇のような所にキリシタン墓地があったことは驚きである。

京都・御土居出土キリシタン墓碑および木簡（平安京左京九条二坊十三町遺跡）

慶長十二年

（十字〔クルス〕の下に）ＩＨＳ　等麻□

十二月一日

御土居堀跡から出土した木簡に日本語と欧文（ローマ字）が併記されている。Peはパードレの略表記である（『木簡研究』）。

（表）記号（○を三つ）　Peせるそ様の　せんか如庵殿

（裏）「mairu」（カ）　＊「　」は文字が逆向き

記号（○を三つ）（ローマ字数文字）　fiel.」

せるそ様は宣教師セルソ・コンファーロネ（Confalonieri, Celso 一五八六―一六一四在日）とされる。裏の末尾 fiel は Faithful.」（忠実なる」）。達筆でポルトガル人の筆跡のようだ。裏が差出人なら mairu（参る）は文意がややおかしい。逆向きのうえ異筆に見える。

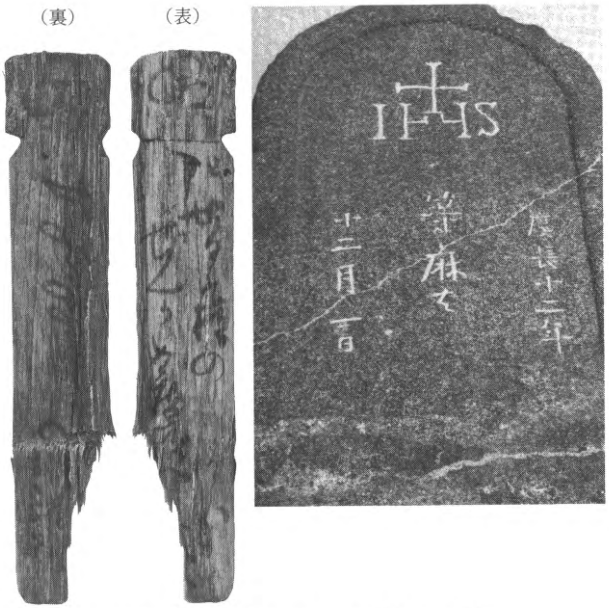

図5　御土居出土キリシタン墓碑および木簡

高槻城跡キリシタン墓

高山右近（ジュスト）の居城、高槻城三の丸跡で木棺墓群がみつかっている。ひとつの蓋には十字架が書かれていた。キリシタン墓である。墓地は北区一六基、南区一一基からなり、不明を除けば全て伸展葬、ただし仰臥と伏臥があった。十字架は二支十字（九州の研究者は「干十字」という、十字の上に横線が入る）で、この木棺には他よりも重厚な木材が使用してあった。木棺二基から木製ロザリオ珠がみつかり、一基では大珠二、小珠九〇、右手首周辺に散乱していて、腕に巻いていたことがわかる。フロイス『日本史』によれば、右近の父、高山飛騨守が轆轤師を招いてロザリオを制作させている。

長崎県南島原市西有家須川・キリシタン（吉利支丹）墓碑（国指定史跡）

十（楔十字紋、背面にも花十字紋）

FIRISACYE
MODIOG.XONE
83 GOXIIRAI 1610
IVG.16 QEICHO 15
（フィリ作右衛門ディオゴ生年八三　御出生以来一六一〇　IVG.16　慶長十五年）

SACYEMO は作右衛門、XONE GOXIIRAI は「生年・御出生以来」、QEICHO は慶長のローマ字表記で、FIRI は未詳。大石一久による拓本写真が『復活の島』にある。「83」は拓本によってもかろうじて読めるかどうかだが、出土時の目撃者が83と記憶していたとある（『長崎県の文化財』）。

大村市原口郷出土のキリシタン墓碑

BASTIAN FIOBV（バスチアン兵部）

大村市今富のキリシタン墓碑

大村市今富町地堂。本来はかまぼこ型で十字紋（「干十字」）があった。いまは起こして「天正四丙十一月十一日　不染院水心日栄霊　一瀬治部大輔」とある。一瀬栄正は一五六三年に大村純忠が重臣二五名とともに洗礼を受けたときの一人。一五七六年（天正四）に没している。没後、弾圧時代に子か孫がキリシタン墓碑そのものを残しつつも、仏式墓碑に改造した（『福重のあゆみ』『長崎県の文化財』）。

大分県宇目町重岡るいさ墓碑

平型の伏墓で、長さ一八〇㌢、幅八六㌢、高さは軸部で二七㌢、両端は二二㌢という巨大なものである。上面の円の中に花十字、正面軸部中央部に「るいさ」、左右に「元和五年」、「五月廿二日」と陰刻する。

八　代

八代は小西時代にディオゴ小西美作が城主となっている。本町金立院に花十字のキリシタン墓碑が残されている。慶長以降数度の殉教があって、今次、列福されている。

この場所とは別に、八代市文化財報告書二〇集として『キリシタン寺院跡』（八代市教育委員会）が刊行されている。『妙見宮実紀』は小西行長が「移神殿於同邑石原、以為天主寺」と記す。地元には伝承もあったようで石原五反田とされている（江上敏勝『八代の史話と伝説・総集編』一九八三）。開発地が伝承地の位置に近接したため調査されたが、関係遺物・遺構は発見されなかった。

4　キリシタン遺物

キリシタン遺物には、ペンダント、メダイ、十字架などがある。長崎から出土する指輪やワイングラスもキリシタン遺物の可能性が高い。

プラケット

二〇〇八年七月、伊東氏の勢力下にあった日向市塩見城跡中山遺跡から土製キリシタンの破片二片が見つかった。一点はベールをかぶった女性（聖母マリア）の顔の一部であった。一点はバラとみられる葉が浮き彫りになっている。戦国時代末期から江戸時代初期の十六世紀後半のものとみられる。上部にひもを通す穴がある。壁に掛けて信仰の対象にした「プラケット」である（壁に掛けて用いる飾り板の大きなものを「プラーク」、サイズが小さなものを「プラケット」と呼ぶ）。

天正遣欧使節となった伊東マンショの出生地に近く、マンショの母親である伊東義祐（日向国主）女子は大友宗麟の縁者とされている。伊東氏領国には信者が多かったと推測できる。

ペンダント

大宰府観世音寺講堂跡の表土よりの採集であるから年代は未詳となるが、マリアを刻したほぼ完形の土製ペンダントが出土している（九州歴史資料館所蔵）。

メダイ

一五六一年トーレスは「博多に教会がある」と書いている（デ・ルカ・レンゾ「博多とキリシタン」『中世都市博多を掘る』）。一五六二年ガゴの書簡に「博多のコスメというキリシタン商人が三〇〇クルザードを費やし、自己負担で教会を建てた」とある。一六〇三年キリシタン子弟のための学校が作られた（ローマ文書 Jap.Sin54, 258v）。福岡はキリシタン大名黒田如水（洗礼名シモン）、子の長政（ダミアン）の城下町である。伏見にて逝去した如水の葬儀は博多の天主堂でおこなわれた（『日本切支丹史』）。親子ともにローマ字印章（Simeon Josui, Curo NGMS）を使用していた。

長崎学長区、有馬学長区、筑前博多、豊後府内が九州の布教基地だった。その博多の息浜から鉛製メダイ（表にキリスト、裏にマリア）、およびメダイと十字架の鋳型、および豊後府内で多く検出されるナスビ型メダイがみつかった。府内と共通する赤褐色ロクロ成形土師器がこの地域に集中することから、博多が大友宗麟（フランシスコ）の影響下にあった時期の遺構と考えられている（佐藤一郎「博多出土のキリシタン遺物」『キリシタン大名の考古学』）。福岡市は近世都市遺跡を周知の遺跡に扱っていないので、キリシタン遺跡は発掘対象になりにくい。今後も長崎ほどにはキリシタン遺物の検出例は増加しないだろう。

北九州市八幡西区に所在する黒崎城下からは、メダイ二点（キリスト像、マリア像・頭上に星を配するサルバトール・ムンディー）が出土している。これらが大友遺跡、博多遺跡から出土する遺物に共通性のあることから、報告書では大友時代の遺物の可能性を指摘している（筑前黒崎は筑前黒田藩領の東端にあり、当初黒田家はキリシタンだった）。

福島県福島市腰浜町では一九六四・六五年にメダイ一〇点が発見された。発見地ジウガ屋敷は江戸時代の「非人」村とされる。弾圧を逃れようとした信者が、困窮者を受け入れたこの村に入って信仰を持続したように考えられる（長島正夫「福島市腰浜出土のメダイ」『福島考古』二三）。

5　弾圧期・潜伏変質期の遺跡

最後の抵抗

今日までもっとも大量にキリシタン遺物を出土している遺跡は、天草島原の乱にキリシタンら一揆が籠城した原城跡（国指定史跡）である。一九九二年以来一六年間の調査でクルス（鉛製二九点、銅製二点）・聖遺物容器二・メダイ一四・ロザリオの玉一三・花十字紋瓦四点が出土している。

原城が多くのキリシタン史跡の中でも際だっていることは、籠城した人々の遺骨が多数出土したことだ。クルスはその遺骨の近くから発見される。遺骨は無数にあるものの、五体が揃ったものは一つもないから何体分であるのかもわからない。大腿骨（だいたいこつ）や脛骨は多く、それで人数が推測されるが、頭蓋骨はきわめて少ない。*乱後に無造作に投げ捨てられ、その上に石垣上端の巨石が落とされた。強靭な膝関節靭帯の力で足の骨だけはバラバラになることが少なく土中に置かれたが、ほかは分散した。

＊一〇六個体については長崎大学・分部哲秋研究室による分析があり、成人での男女比は二対一、二六個体は少年少女であった（"ANTHROPOLOGICAL SCIENCE" 114-3, 115-3, 2006-2007）。

四〇〇年を経て悲惨な歴史的情景が再現されたのである。だがこの情景は発掘の現場にいあわせたものしか見ることができなかった。遺骨は他の遺物と同じように現場からは取り上げられ、整理箱に入れられて収納されている。現地は戦い以前の状態に戻った。ただし本丸正門前の人骨出土状況については、レプリカが作成されて、原城文化センターに展示されている。ここは観光地には組み込まれていないから、原城を訪れる人もほとんどが足を運ばないが、必ず見学すべきである。

なお発掘調査の開始以前、一九五一年に本丸畑の地権者が黄金十字架を発見した（現在、南蛮文化館

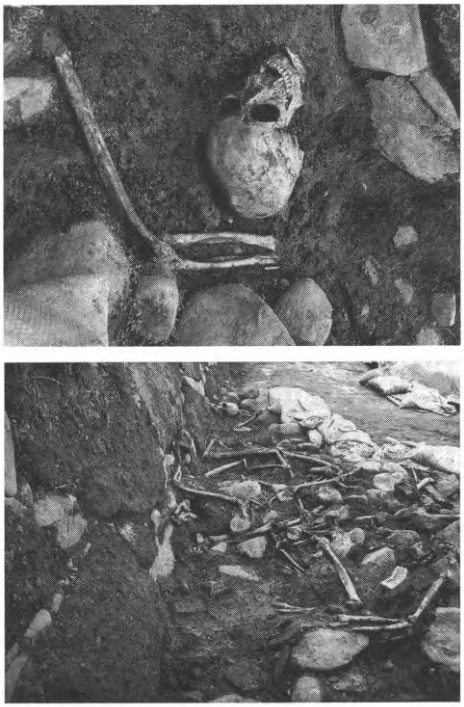

図6　原城　人骨の出土状況

蔵）。ローマ教皇が天正遣欧使節に渡したもので、有馬晴信が所持し、甲斐流罪となる。その死を経て、ふたたびそれを持つことのできた近臣が原城に籠城したという見解がある。

原城について多くを語る紙面の余裕はないが、著作は多い。史跡の観点からは八代市立博物館編『天草・島原の乱』（二〇〇二）、石井進・服部英雄編『原城発掘』（二〇〇三）、服部英雄・千田嘉博・宮武正登『原城と島原の乱』（二〇〇八）がある。

有馬氏のもう一つの拠点、日野江城跡（南島原市、国指定史跡）でも発掘調査がおこなわれているが、これまでキリシタン遺物の発見はない。しかし高山右近の高槻城では城内に教会があったことからすると、同様な構成になっていたと推定される。この城は東西で構造を異にし、縄張りからも二分される。直線的な階段（石段）を持つ東側に、教会があった可能性が考えられる。天正遣欧使節はこの城内で有馬晴信に見送られて出発し、帰国後もこの城で報告をしている。周辺にセミナリオがあった。

弾圧期の信仰遺跡と遺物

近世という過酷な時代をくぐり抜けてキリシタン遺物が伝来した。双璧は茨木市千提寺の民家に隠し伝えられたザビエル像ほかと、仙台藩・支倉常長使節関係遺品とである。前者はいま、京都大学、神戸市立博物館などに保存される。ザビエル像は大半の歴史教科書が掲載している著名なものだ。『彩都周辺の歴史・文化調査報告書』（一九九九）には一連の遺物や伝承してきた村落のもっとも詳細な分析がある。後者は旧仙台藩切支丹所保管品であり、支倉常長史料を網羅する『大日本史料』十二編十二には伊達家所蔵とされている。長崎・日本二十六聖人記念館所蔵の「雪のサンタ・マリア」画像も外海（西彼杵半島西岸）の信者が代々伝えてきたものである。

すでに多くの報告があるように、信者たちは数代後には自身の宗教の本質を忘れてしまっていたが、神祈りにはオラショが濃厚に反映され、口ごもりつつ「アベマリア、アベマリア」と唱えられる。日常拝礼する納戸神や辻の神様にはマリアやイエスの残像が伝えられた。

平戸島、生月島、五島列島、また外海に所在する潜伏期の信仰遺跡が明らかになってきた。それらのうちには遠藤周作編『大航海時代の日本・南蛮博物館』（一九八一）などで早くから知られたものもある。平戸市根獅子ウシワキさまの森は長らく禁足の森であった。根獅子に寺を転用した教会があることは一五六六年九月十五日付、フェルナンデスの書簡にみえる。二〇〇八年平戸市教育委員会による発掘調査によって伸展葬の人骨が発見され、キリシタン墓地だったことが判明した。この周辺では従前からも多数の人骨が出土していた。

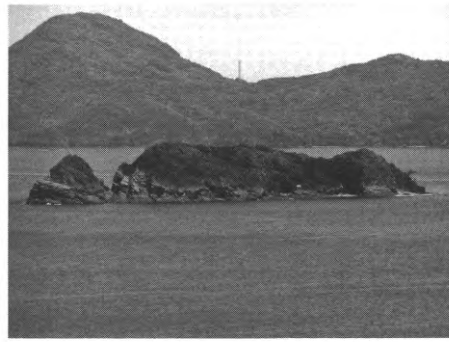

図7　中江ノ島

一六二二年（元和八）、キリシタンのジョアン・テンカモト・ザエモン（阪本左衛門）はナカエノシマ（中江ノ島、現平戸市）で斬首された（『日本切支丹宗門史』）。中江ノ島・サンジュワン殉教地は、現在に至るまで霊地となった。信者がオラショを唱えるその時間帯だけ、岩の間から聖水が流れ出す。

枯松神社（外海、長崎市下黒崎）では、参道から外れた「祈りの岩」に信者が集まり、オラショを唱えた。明治になってサンジワン（指導者バスチャンの師、サンジュワン）を祭神とする神社を建立した。

二〇〇八年、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」がユネスコの世界遺産（World Heritage）暫定一覧表に登録された。本登録を目指して関係遺跡が調査されている。

参考文献

アレグリーノ・アレグリーニ訳「佐賀のキリシタンについて」『新郷土』六―八、一九八二年

大分県教育庁埋蔵文化財センター編『豊後府内6　中世大友府内町跡第一〇次調査区―ダイウス堂および祐向寺付近の発掘調査―』二〇〇七年

大阪府文化財調査研究センター編『彩都』（国際文化公園都市）周辺地域の歴史・文化総合調査報告書、一九九九年

北島治慶『鍋島藩とキリシタン』佐賀新聞社、一九八五年
九州国立博物館『古代九州の国宝』二〇〇九年
グラウディオ・ニエト、久富紀子訳『ドミニコ会の愛と受難―キリシタン時代の日本布教史の断面―』
『久留米城下町両替町遺跡』久留米市文化財調査報告書　第一一六集、一九九六年
『黒崎城跡』三、北九州市教育委員会、二〇〇七年
ジアン・クランセ『日本西教史』洛陽堂、一九一三年
杉谷　昭「十七世紀初頭、肥前国鍋島領におけるドミニコ会（正・続）」佐賀大学教育学部研究論文集三二―1、2、のち前者は「肥前国鍋島領におけるキリスト教」『肥前史研究』
『高槻城キリシタン墓地　高槻城三ノ丸跡北郭地区発掘調査報告書』高槻市教育委員会、二〇〇一年
為永一夫編『大村純忠の夢』活き活きおおむら推進会議、二〇〇九年
千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会編『東京駅八重洲北口遺跡』二〇〇三年
『長崎市勝山町遺跡』長崎市教育委員会、二〇〇三年
名護屋城博物館『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』所収図版
パチェコ・ディエゴ（結城了悟）『鹿児島のキリシタン』および所引のコロウス書簡、一六一七年二月二十二日（長崎発）、ローマ文書 Jap-Sin58, 437-38、ジョアン・ロドリーゲス・ジラム書簡一六二五年三月十八日
『福者アロンソ・デ・メーナの書簡報告』キリシタン文化研究シリーズ二三
フロイス『日本史』松田毅一・川崎桃太訳、中央公論社、一九七七―八〇年
別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編『キリシタン大名の考古学』思文閣出版、二〇〇九年

（マカオ発）Jap-Sin60, 344-344v; 460v
松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』同朋舎、一九八七―一九九八年
三好不二雄監修『郷土史辞典　佐賀県』一九八一年
森　浩一編著『姥柳町遺跡（南蛮寺跡）調査概報』同志社大学文学部文化学科考古学研究室、一九七三年
若林邦彦「硯に描かれた聖職者たち」
http://hmuseum.doshisha.ac.jp/html/articles/record/detail.asp?xml=record20060906.xml